体験通し自身を育てる

教育旅行において観光型から体験型へといった言葉は、すでに言い古された感がある。型にはまった体験や得るべくして得る感動を超えて、よりアクティブな探究心へと行動パターンが変化してきた。一方、貴重な文化財や自然などの地域資源が観光化されるなかで、観光地と呼ばれる地域であえて本来の姿を見直そうとする動きもある。どちらも理に叶っている。学校が求めている教育旅行、実施している教育旅行とはどのようなものか。目的や教育的意図、効果などを聞いた。

専修大学附属高等学校
沖縄　3泊4日
12年3月　実施

修学のための旅行視点 6教科が集結して育む

専修大学附属高等学校（鈴木高弘校長）は、29年（昭和4年）に開校された東京都内でも有数の伝統校だ。杉並区和泉の学窓では、「誠実・努力」の校訓と「報恩奉仕」の建学精神の下で、1200人の生徒が学びの日々を過ごしている。

同校の修学旅行は、2学年の3月に毎年実施される。行き先は「平和学習とリゾートが体験できる沖縄で、10年以上も続いている」（長谷川素道主任）。行程は3泊4日だが、1学年402人が一度に動くのは難しい。第1班が5日、1日遅れで第2班が6日に旅立つ。

修学旅行への準備は、沖縄のしおりやビデオ映像などによる一般的な事前学習を行っているが、特筆できるのは同校独自の「沖縄ウィーク」の実施だ。今年は2月15日から21日まで実施された。校内が沖縄色に染まる。ただし、お祭り騒ぎをするわけではない。沖縄の音楽が流れる程度のものだが、この期間の2年生の授業内容が一変する。

生徒は「沖縄ウィーク大辞典（改）」と名付けられたテキストを手にする。総ページ数は146ページ。収録されているのは、地理、日本史、政治経済、現代国語、古典、英語の6科目について、それぞれ沖縄にかかわる内容ばかり。各教科の担当教諭16人がオリジナリティ豊かに編さんしている。

例えば地理では、沖縄を歌った名曲「さとうきび畑」を通して沖縄とサトウキビを考えながら、うちなーんちゅ（沖縄人、本土人はやまとんちゅ）との出会いを捉え、地形図から歌詞の冒頭「ざわわ」の背景を俯瞰し、平和学習で訪れるガマ（沖縄戦の避難壕）での追体験のあり方、そして集った全員で喜びを表すカチャーシー（民謡に合わせた踊り）を生んだ県民性までを、地理の教科としてまとめ上げている。また、政治経済では基地問題を捉える一方で「ちょっと待て、基地問題は沖縄だけ」と、東京にある米軍基地問題にも触れている。他の教科もそれぞれ多様な角度から沖縄を捉え、沖縄と生徒自身の接点が身近に感じられる組み立て方は、同校の校訓を各教諭が生徒に対して顕現させた形にほかならない。テキストの冒頭で、担当する教諭は「全員ガチ（本気）」と記しているのも頷ける。

ちなみに「沖縄ウィーク大辞典（改）」とあるのは、4年前に地理、日本史、政治経済の3教科で始まった取り組みが、昨年「沖縄ウィーク大辞典」にテキスト化され、今年はさらに6教科へ進化した「改」の意味がある。「学年ごとに特色を出しながら、さらにアップを目指す」（野坂崇教諭）。

こうした準備の下で本番。行程は1、2班とも同じで、1日目は沖縄入りした後、ひめゆり会館、ひめゆり平和祈念資料館、摩文仁の丘などを巡る平和学習。ホテルで夕食の後、午後8時から1時間の平和講話を聞く。語り部は、沖縄戦体験者の上原当美子さん。「講話のお礼に立った男子生徒が途中で泣き崩れてしまった」（長谷川主任）。

沖縄戦の悲惨さと平和の尊さが、余すところなく生徒に伝わった証しだった。

2日目は、午前中に糸数壕、旧海軍司令部、沖縄ワールドを巡る。「ガマの見学は足場の悪さなどで中断した時期もあったが、生徒はそこでの説明にも神妙な面持ちで聞き入っており復活させてよかった」（長谷川主任）。前日から続く平和学習の一連の流れは、生徒それぞれの心に大きなインパクトを与えたことが、両教諭の話から容易に浮かび上がってくる。

2日目の午後は、沖縄体験学習のコーディネート組織ニライカナイで、「イノー（海岸や礁池）観察」をはじめ多様な体験メニューに臨む。ニライカナイについて両教諭は言う。「昨年からニライカナイを利用している。とても温かで人と近しい接し方がいい。生徒のためにしてくれている姿勢を感じる」と評価した。3日目は、生徒が事前に組んだコースでのタクシー研修。4日目は首里城公園ほかを見学して帰途についた。

これらを総括すると同校の修学旅行は、2月の「沖縄ウィーク」から本番が始まっていた。両教諭は「教師にとっても新しい発見が毎回ある。それは沖縄自体のことであり、生徒の受けとめ姿勢の両方に見出せる」と。「だから楽しい」とも言う。それが1週間の授業のために、膨大なテキストを編さんする原動力でもあった。「将来的には民泊も考えてみたい」と旅行先の沖縄への期待も進化し続けている。

語り部の話を聞いた後の答礼で生徒が泣き崩れた平和講話

野坂崇教諭　長谷川素道主任

16教諭の力作沖縄テキスト

平和を祈念して神妙に手を合わす

沖縄ならではの環境学習

パイナップルの話に耳を傾ける

伝統装束でポーズ

東京都立蒲田高校
青森　3泊4日
11年10月　実施

宿泊体験研修を通して 社会性や勤労を学ぶ

東京都立蒲田高校（上村肇校長）は、都内に5校ある「エンカレッジスクール」の中の1校として人気の高校だ。エンカレッジスクールとは、「中学時代までに力を発揮できなかったので学び直したい」「可能性を広げたい」などと考えている意欲ある生徒を対象にしている高校で、入学試験では学力検査を課さず、面接などによる人物重視の選抜を実施。授業でも習熟度別授業を行うなどの特徴を持つ。

1年生のカリキュラムに組み込まれている「体験」の授業も特徴の1つ。「スピードミントン」などのニュースポーツや茶道などの伝統文化体験、地域清掃などを行う「特別清掃ボランティア」など多彩な選択肢から、希望のものを選び受講する。体験を重視した授業を通して、社会で役立つ知識を身に付けたり、自分の新しい可能性を再発見したりするのが目的。また体験の授業の多くは地域の人を講師に招いており、教師以外の大人との接点を持ち、社会性やコミュニケーション能力を養うことも狙いの1つとしている。

この体験の授業の延長として同校では、エンカレッジスクールとしての教育を始めた07年から、1年生、2年生の2回、宿泊体験研修を実施している。「『物見遊山』ではなく、何らかの『体験』を通して、社会性や勤労を学ばせようというところからスタートした」と話すのは、3月まで同校の校長であった佐藤則夫・都立小松川高校校長。

09年度までは1、2年生とも青森県平川市で実施。10年度からは費用面の問題などもあって、1年生は新潟県奥阿賀、2年生は青森県平川市で行っている。

昨年の青森での宿泊体験研修は10月4～7日に行い、2年生162人が参加した。東日本大震災の影響で東北新幹線が運休し、交通面の心配もあったが、4月末には新幹線の運転も再開し、また保護者らから東電の原発事故による放射能の影響を懸念する声も挙がらなかったため、予定通り実施した。

同校の研修は、すべての時間が受け入れ農家との生活に割かれる。1日目の午後に平川市に入った生徒たちは、入村式で受け入れ農家と対面。その後4～6人ずつ約40軒の民泊先に分かれると、4日目の昼食までを受け入れ農家で過ごす。

生徒たちは旬を迎えたリンゴの収穫作業や、色付きをよくするための反射シート敷き、そのほか薪割りや稲刈り、豆類のさや出しなど、受け入れ農家ごとに農作業を行った。佐藤前校長が「（1年生で訪れた）新潟よりも青森の方が専業農家が多いためか、作業も本格的でかなりの重労働」と言うように、事後感想文でも農作業の大変さに触れる生徒が目立つ。しかし「農家の人の仕事の大変さがよく分かった」「農作業は大変だったが、達成感があった」など、生徒達は大変な仕事の中に働くことの喜びなどさまざまなものを見出したようだ。

もちろん民泊先で体験するのは農作業だけではない。一緒に夕食を作ったり、近くの温泉まで入浴に行ったりと、受け入れ農家の家族の一員のようにして過ごす。「今の生徒は大人数でにぎやかに食事をとることが少ないので、食事ひとつとってもいい経験になる」と佐藤前校長。教師が民泊先を巡回すると、すっかり受け入れ農家になじんだ生徒たちから、『僕が作った夕食食べていってよ』などと勧められることもあるという。

「入村式と離村式とでは、生徒の変化は大きい」と佐藤前校長は語る。緊張の面持ちでぎこちなく民泊先に分かれた生徒たちも、初対面の家族と寝食を共にし交流を深めることで、3日間のうちに絆を結び、深める。離村式で涙を流して別れを惜しむ生徒が少なくない。また生活を共にしたクラスの仲間との結びつきも強まるという。

同校では、宿泊体験研修のために特別な事前学習は行っていない。クラスの旅行委員が、ムードづくりのために青森についてまとめたプリントを作成するのみ。事後指導についても、感想文を書かせたり、文化祭の企画に青森に関する内容を盛り込ませたりする程度だ。これはあくまでも現地での生の交流や農作業体験そのものによる学びを重視しているためだ。

生徒たちが農作業を通して働く喜び、青森の自然や食の豊かさなどを知る一方で、佐藤前校長によると一部の生徒から「他校のように沖縄などへの修学旅行に行きたい」との意見もあるという。しかし青森での仲間との研修は、大人になってからはできない貴重な体験。「生徒たちもこの研修の価値が後からきっと分かるはずだ」と佐藤校長は断言する。同校では今後も農家民泊を中心とした宿泊体験研修を、体験を通した学びの場の1つとして続けていく考えだ。

佐藤則夫前校長

豆のさやだし

水路のかき出し作業も体験

受け入れ農家でのにぎやかな夕食風景

リンゴの袋はずし

ビニールハウスの調整などにも挑戦した

仲間と協力しあいながらの収穫作業

学習旅行は、オールシーズンで体験できる志賀高原・北志賀高原へ!!

志賀高原・北志賀高原は、スキー学習旅行の受け入れの歴史が古く、全国トップのご利用をいただき、オールシーズンで充実した学校生活形成の一端を担わせていただいております。

大都市及び周辺では得られない豊かな環境を生かした、安心で安全な自然体験学習ができるよう引き続き努めてまいります。

■志賀高原「日常を忘れ、大自然を心から満喫。」

志賀山・横手山・岩菅山など 2,000m級の山々を控えた自然の宝庫、志賀高原。大小 70 余の美しい湖沼や湿原が点在しています。

「池めぐりコース」や「岩菅山登山コース」など全 18 あるトレッキングコースでは、手軽に雄大な自然に触れることができ、自然環境学習に最適な高原です。

■北志賀高原「美しい自然と素朴な山里が心を癒す。」

標高 1,930mの竜王山、別名「高井富士」と呼ばれる高社山の山麓に広がる大自然は、さまざまな花や高山植物が可憐な姿を見せてくれます。さわやかな風が流れる豊かな山里は、果樹園や田園が広がり、素朴であたたかな伝統に触れることができます。

お問合せ　長野県学習旅行誘致推進協議会
山ノ内町支部　事務局
TEL：0269-33-1107　FAX：0269-33-1104
http://www.gakushukyo-y.net
〒381-0498　長野県下高井郡山ノ内町大字平穏 3352-1

毎年2800校以上にご来県いただいている

信州・長野県への学習旅行は

お問合せ・資料請求先
蓼科高原／茅野市観光協会
TEL:0266-73-8550　FAX:0266-72-5833
http://www.tateshinakougen.gr.jp/
〒391-8501
長野県茅野市塚原2-6-1（茅野市役所内）

お問合せ・資料請求先
長野県学習旅行誘致推進協議会 事務局
TEL:026-238-9670　FAX:026-232-3220
E-mail:gakushu@nagano-tabi.net
http://www.naganoken-gakushuryoko.net
〒380-8570（住所不要です）
長野県庁東庁舎2階 長野県観光協会内